

谷口真由美著

『リプロダクティブ・ライツとリプロダクティブ・ヘルス』

信山社出版, 2007年4月刊, 193pp.

1994年の国際人口開発会議（カイロ会議）で国際的合意を得た「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（reproductive health/rights, 性と生殖に関する健康・権利）」（筆者は「リプロダクティブ・ライツ」と「リプロダクティブ・ヘルス」を混同すべきでない」と主張するが、ここでは一般的な使用例に従って、特に断りのない限り「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」と表記する）については、10年以上経過した今日でも、日本ではまだ広い理解が得られていない。それゆえ、筆者が指摘するように日本の政策の中にリプロダクティブ・ヘルス／ライツの概念に合致しないものが存在することは当然かもしれない。

本書はこの「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」という概念、国際社会における合意、人権条約の履行監視機関による実行や解釈、さらに日本の政策について丁寧に分析することを試みた力作である。このようなテーマの専門書籍は少なく、本書はきわめて貴重な存在である。

筆者は「リプロダクティブ・ライツとリプロダクティブ・ヘルス」の概念の出現の背景に、複雑な国際社会の妥協があるため、使用する者によって都合よく利用されていることを批判的に捉え、両者の違いを整理している。さらに、それぞれの概念が登場し、国際的に認識されてきた背景を分析し、両者を安易に混同すべきでない」と強調している。確かに、日本ではそれぞれの意味するものを深く考慮せず「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」とひとまとめにして使用していることも多く見受けられ、その意味するところがあいまいになっていることは筆者が指摘している通りである。

しかしこの二つの概念は、国際社会、国際政治の根幹に直接影響を及ぼす重要な概念であるだけに、その背景にある各国の政治、宗教、市民社会の成熟度合い、市民運動などと切り離して考えることはできない。また、生命、生き方、その総体としての社会の価値観にまで影響を及ぼすものであり、それゆえに政治的に利用されやすい概念である。

その典型が、いわゆるリプロダクティブ・ヘルス／ライツ分野でのバックラッシュである。米国がグローバル・ギャグ・ルールを制定したこと、その後の国際会議でも人工妊娠中絶や性教育など、当事者の健康や権利の視点と合致しない主張を強弁したこと、さらにグローバルな観点からは、当初の国連ミレニアム開発目標（MDGs）の中にリプロダクティブ・ヘルスサービスへの普遍的アクセスが記載されなかったこと（その後、MDG5の新ターゲットとして追加されることが決定された）、今年に入って世界銀行理事会においてリプロダクティブ・ヘルスサービスに関する項目を削除する提案がなされたことなど、今世紀に入ってから特に、政治的課題となる場面が多くなっている。今、カイロ会議から続く流れを逆行させない仕組みが必要とされているのではないだろうか。

また、この概念は筆者が指摘するように一定の思想と価値の体系であるため、その概念と密接な関係をもつ女性のエンパワーメント、政策提言活動などの関連するアプローチや思想の紹介や検討があると、読者に分かりやすくなると思われる。また、「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」の概念の成立・発展や、関連する国際的合意の背景には、例えばカイロ会議に向けて国際女性健康連盟が女性たちを結集した運動や、日本での旧優生保護法改正をめぐる運動など、膨大な市民社会運動が存在したことの関連も言及してもよかったのではないと思われる。

このように、これからの検討事項はあるものの、リプロダクティブ・ライツとリプロダクティブ・ヘルスの概念についてまとめた本書の存在は貴重であり、日本の市民社会をはじめとする関係者の、この二つの概念の深化に向けたさらなる展開を期待したい。

池上清子（国連人口基金東京事務所）